



2025年6月4日全道司牧者大会

これからのシノドスの歩み

9月4日に全国のシノドス担当者が集められ「シノドス勉強会」が大阪・高松教区事務局にて行われました。教皇フランシスコが招集したシノドスで総書記を務められたオロリツシュ枢機卿が来日され、世界レベルでのシノドス実施における苦労や、実りについての経験を講演していただく機会が用意されました。オロリツシュ枢機卿は、かつて上智大学で教鞭をとられていた経験から、とても流暢な日本語で講演を行ってくださいました。シノドスを進める様々なレベルでの会議の中では、多くの批判的な意見も出たこと、そして、多くの意見が世界中から集められ、それらの意見を集約し進めていく苦労は並大抵ではなかったことが伝わってきました。しかし、色々な意見を持つ司教や参加者がいる中で、最終的に皆がひとつのテーブルについて分かち合う「霊における会話」の重要性が強調されていたことが印象的です。その集大成として「最終文書」が出され、これからの教会の歩んでいく方向性のヒントが「霊における会話」というスタイルの中に与えられているのだということが感じられる講演でした。

勉強会では、シノドス特別チームの小西神父による導入があり、オロリツシュ枢機卿の講演の後、グループに分かれて、シノドス特別チームのメンバーがファシリテーターとなり、改めて「霊における会話」の体験会が開催されました。今後、日本の教会は、2028年にバチカンで開催される「教会会議」へ向けて、それぞれの国、それぞれの教区で歩みを進めることとなります。そして、その教会会議への歩みの中で、重要視されているのが「霊における会話」です。

●札幌教区における歩み

札幌教区においては、昨年10月に「札幌教区シノドスの集い」を開催し、講師にシノドス特別チームの高山徹（あきら）神父を招き、各地区から代表者が集まり、司教、司祭、修道者、信徒が一堂に会して、「霊における会話」の講演会および体験会が行われました。

その後、各地で地区のカトリック大会や小教区で「霊における会話」をやってみようという声が寄せられ、札幌教区シノドス・チームおよび、教区シノドスの集いを一緒に企画してくれた、シノドス・サポーターのメンバーと共に、各地区や小教区単位で「霊における会話」の体験会が実施されています。シノドス・チームやシノドス・サポーターのメンバーは、体験会実施のお手伝いに伺うことができますのでお声がけください。

●「霊における会話」の実践について

しかし、今、わたしたちが推奨し進めているこの「霊における会話」は、「熟練したファシリテーター」がいなくては進められないものではないことを皆さんに知っていただきたいと思っています。もし、熟練したファシリテーターがいなければできないようなものであるなら、これからのわたしたちの歩みを支える「ツール」としてはあまりに重すぎて、きつと浸透することはないでしょう。この「霊における会話」は、いくつかのルールさえ押さえておけば決して難しいものではなく、身構えてしっかりと準備してからでしか使うことができないツールでもありません。

そこで、ここに簡単なポイントと進め方、注意点をまとめておきたいと思います。

●「霊における会話」の実施方法

- ①分かち合いの「テーマ」の選定。（例「信仰生活で得た恵みは何ですか？」など）
- ②聖書などから「黙想の助け」となるみことばを選ぶ。
- ③みことばを聞き、しっかりと黙想の時間（15分～30分程度）を取り、自分が分かち合う内容を、しっかりとメモする。
- ④第1ステップ▼一人3分の分かち合い。先の黙想で自分が分かち合いたい内容のメモを発表する。発表時間は厳守。この際にメモの内容を、変更しないことが重要。そして、他の人の分かち合いを聴きながら、「心に残ったこと」などをメモしていく。2～3人が分かち合ったら1分程度の黙想の時間を取る。
- ⑤第2ステップ▼一人2分の分かち合い。第1ステップで他の人の意見を聴いてメモした「心に残ったこと」あるいは「それを聞いて感じたこと」を発表する。これも発表時間厳守。ここで第1ステップで「言い残したこと」や「新たに思い浮かんだこと」を付け加えないように注意。また、聴いた意見に対する「批判」や

「反対意見」は控えるように気をつける。この時も、2〜3人分がち合ったところで、1分程度の黙想の時間を入れていくようにする。

⑥第3ステップ▼第1・第2ステップを通して、自分の中に去来した「キーワード」を付箋などに書き出し発表する。発表の際に皆さんが書いたキーワードを示しながら、その意味や思いを発表する。そして、全員のキーワードが出そろったところで、全員でそれらを眺めつつ、今このグループにおける結論を、一つの文章として言語化してみる。この文章化、言語化の作業は、誰かが代表して行うのが相応しい。そのうえで、その文章を皆で話し合いつつ、整えていく作業をしてみると良い。ここに、聖霊がこのグループをどこに導こうとしているのかが見える。

※それぞれの共同体で行う際に「霊における会話」に慣れるため、第1ステップと第2ステップだけを、繰り返し行うのも良いでしょう。3分という発表時間に慣れることが、スムーズで簡潔な分かち合いに繋がっていくと思います。慣れてきたら、自分たちで上記ステップを「アレンジ」していくの良いかもしれません。

●各段階の意味

①②③みことばを聴き、テーマを黙想すること

わたしたちの心に聖霊の働きを願う時は、やはり黙想することが大切になります。わたしたちの心は濁った泥水のように、様々な思いが渦巻いているような状態で、みことばの助けを得て、静かに祈ることです。その泥水を沈殿させ、自分の心の中にどんなものが入っているのかを見つめる時間こそが、祈りと黙想の時間となります。そしてそこに去来する思い、分かち合いたいと思う意見をまとめてメモに残し、それをその時感じたままに分かち合う準備とします。黙想の際には、相応しい音楽などをかけて、黙想の助けにするのも良いでしょう。ここで書かれたメモの内容は、発表時に変えてはいけません。

④第1ステップ▼メモ内容を変更してはいけないのは、話している人の話をしっかりと「聴く」ためです。他の人の意見を聴いて思い出したことがあり、新たにそれを付け加えようとしたとき、わたしたちはその人の意見を聴いていません。自分が何を言おうかという想念に取りつかれて、話を聴くことができなくなるのです。この「霊における会話」の大きなポイントは「分かち合う」ことよりも「聴く」ことを大切にすることです。

⑤第2ステップ▼ここで発表する内容に、言い残しなどの新しい意見を付け加えない理由は、「自分が聞いた意見から何を受け取ったのか」を大切にするためです。自分が話したい内容ではなく、今、目の前で話している人から、自分が「何を受け取ったのか」を咀嚼し、そして発表することに重きを置くため、新しい意見を加えることはしません。

⑥第3ステップ▼ここでの分かち合いと作業は、これまでのステップを経て、自分が受け取ったものをキーワードとして表明し合って、聖霊のささやきに耳を傾け、まさに「識別」をしていく作業です。中には、正反対の意見を持ったメンバーがいるかもしれませんが、メンバーがお互いの話を受け取り合ったうえで出てきたキーワードから、一つの文章としての言葉を紡ぐ時、お互いを受け入れ合った方向性が見えることもあります。

●「霊における会話」を実践してみませんか？

この「霊における会話」は、あくまで分かち合いの一つの手法であり、単なるツールに過ぎません。これを「使わないといけない」のではなく、それぞれの共同体で、よりお互いに「聴きあう」共同体になるための、一つの手段として選んでいけたら良いと思っています。

これからの教会のかじ取りを、強いリーダーシップを発揮する人に任せるのではなく、聖霊に委ねることができた時、「主の平和」が実現するのかもしれない。

(シノドス担当司祭・佐久間力)

カトリック中高生キャンプ2025 in 羽幌

8月4日〜6日の日程で、カトリック中高生キャンプが開催されました。中1から高1まで10人の中高生が参加してくれました。

今年のキャンプは道北に位置する「羽幌教会」を使わせてもらってのキャンプで、計画では2日目に「焼尻島」に渡って自然散策をする予定でしたが、残念ながら雨天となってしまうため少し計画を変更して、羽幌教会の信者で町議会議員の方のご協力により、羽幌町内の「野鳥センター」や滅多に立ち入ることのできない「町議会議場」などを見学する機会を得ました。その他にもカニ釣りや海水浴、花火などを楽しみ、朝晩は神様の前に祈って過ごす時間を共にして、最後は千葉神父のミサで締めくくりました。

参加者はとても良い経験になったと思います。中には、友達に誘われて、初めて教会に来た方もいて、素晴らしい種まきになった気がします。

参加者の感想文と写真を教区ホームページに掲載しておりますのでどうぞご覧ください。

(青少年委員会・佐久間力)



各地区カトリック大会

■釧路地区

8月最終主日、勝谷司教を迎えて5年ぶりに釧路地区（釧路ブロック・十勝ブロック）8ヶ所の信仰共同体の合同集会（カトリック大会）を釧路教会で開催することができた訳ですが、コロナ禍の影響は様々な形で引きずっていったようです。それは何よりも2019年11月の前教皇・フランシスコの来日直後であったこともあって、日本の教会では特にシノドス流の教会の出足をくじかれた感があるといえます。そんな中での開催でした。地区宣司評による準備もままならず（昨年は中止）、更に今年は釧路地区宣司評事務局と教区シノドス・チーム（荒木関充氏）を交えてのミーティングも、オンラインでの意見交換には限りがあり、互いの理解のずれなど積み残された課題もあったことは否めません。しかし、そこに聖霊の介入の余地が残され、神のはからいを体験できた今年の主日のカトリック大会であったとも言えます。賜物の与え主・聖霊が主役になり、そして導き手になり年間第22主日



の地区カトリック大会は終わりましたが・・・。

問題はこれからです。「私たちの希望である主が釧路地区共同体に示される道」と銘打って開催されたわけですから、午前中のミサ（含説教）及び午後の「霊における会話」で具体的に示されたこの道をどのように実践できるかです。シノドス流の教会はそこを指して進んでいくことを問いかけています。

やりつ放しは許されません。このことは具体的実践として「霊における会話」を日常の教会における信仰生活の場の中で優先して取り組んで生かしていくという事でもありません。最後にシノドスの総括文書の一節を紹介し振り返りの締めくくりとします。



「霊における会話」は一つの手段であり、限界はあるにせよ、『霊が諸教会に告げること』（黙示録2・7）の聞き取りと識別をかなえ、多くの実りをもたらします。この実践は喜び、驚き、感謝を生み出し、個人、グループ、そして教会を変容させる刷新の歩みとして経験されました。：」（総括文書 シノドス流の教会 No.45）

（釧路地区長 川上剛神父）

■函館地区

残暑厳しい8月31日、函館地区の使徒職大会が宮前町教会で開催され、前半が桶田達也助祭による講演「聖年について」、後半は合同ミサという内容で行われました。講演内容は以下の通りです。

【起源】

旧約聖書で、神による天地創造が6日間で終わり、翌日の7日目と安息日とされたように、6年の労働の後、7年目を安息の年とするようにと律法が定めた安息の年を由来としている。（『レビ記』「安息年とヨベルの年」）

【歴史】

教会の歴史に残る第1回目の聖年は、教皇ボニファティオ8世が1300年に教書「アンティクオルム・ハベト・フィデム」（古代の人々の信仰を持って）によって、全キリスト教徒に使徒ペトロとパウロの墓への巡礼を呼びかけ始めた。1470年、教皇パウロ2世が、25年に一度聖年を挙行することを決めた。これは、すべての世代が大きな免償を獲得できるようにとの配慮だった。この規定は、今日なお実行されている。ただし、1800年と1850年は聖年とされなかった。20世紀に入り、教皇ピオ11世は二度の特別聖年を実施した。これは第一次・第二次世界大戦の間の時代背景が影響していたものと考えられる。

【巡礼】

聖年の期間中、ローマの四大バジリカをはじめ各司教区に巡礼教会が指定され、あら

ゆるる罪を退ける決心をし、ゆるしの秘跡を受け、聖体拝領をし、教皇の意向のために祈る者は、全免償を得られる。またそれを煉獄の靈魂のために振り替えることもできる。

【教皇の意向】

「希望は欺かない」

「聖年は、ついでることのない希望、神への希望を際立たせる聖なる年です。希望が、わたしたちを通して、それを望む人たちに浸透していきますように。わたしたちの生き方が、彼らに『主を待ち望め、雄々しくあれ、心を強くせよ。主を待ち望め』（詩編）と語りかけるものとなりますように。主イエス・キリストの再臨を信頼のうちに待ちながら、わたしたちの今が希望の力で満たされますように。」

（桶田達也助祭）



ベトナム青年大会

第3回全道カトリック青年大会は、「希望をもって信仰の道を歩む」というテーマで、2025年8月9日～10日に行われました。今回の大会は、2年ぶりの開催となりました。3回目の大会も、過去2回と同じ「札幌市青少年山の家」で行われました。

今年は、札幌からの参加者が最も多く、次は帯広で、北海道の他の地区からもベトナム出身の青年達が集まり、来賓を含め、約80人が共に祈り、分かち合いなどを通して、楽しい2日間を過ごすことができました。

私たちは全教会と共に、「希望の巡礼者」というテーマで2025年の聖年を迎えています。聖年では、神が私たちに与えてくださった恵みを新たに発見し、感謝する機会となります。同時に、神がいっつも私たちの信仰の歩みに寄り添ってくださっていることを再確認します。つまり、私たちは一人で歩むのではなく、常に神の愛と光に導かれているのです。

この聖年の意味をより深め、意識して信仰生活を送るために、第3回全道カトリック青年大会は「希望をもって信仰の道を歩む」をテーマにしました。この大会を



通して、一人一人が自らの信仰と希望を振り返り、神様と共に歩み続けるための大切な機会になると期待しています。

北海道という遠く離れた所にあっても、恵み豊かな機会を通して自分の信仰を強め、希望を抱きながら信仰の旅路を共に歩んでいきます。今回の大会は、新潟・広島両教区からベトナム人司祭2名、東京から来賓、そして札幌教区から千葉神父も参加してくれました。

1日目は、十字架行列、野外レクリエーション、そして夜には聖体礼拝後、キャンプファイヤーを囲んで一致の時を過ごしました。

2日目は、朝の体操、グループ紹介やゲーム、そして来賓として来られた司祭の講話、分かち合い



の後、ゆるしの秘跡とミサを行いました。来賓の方達からは、講話や分かち合いの時間に、信仰や希望に関わることにについて分かち合い、いろいろなアドバイスをいただきました。

今年は、転勤や帰国等の理由で、例年より参加者数が少なくなりましたが、神様の恵みの中で約80人が交流し、一緒にゲームをしたり、お祈りしたりしました。2日という短い間でしたが、皆が「新しい友達ができ、仲良くして、たくさん良い思い出を作りました」、「今回の大会で、皆と集まることができ、共に祈り、分かち合うことができ、聖年の恵みを受けることができました」など、喜びの感想が聞かれました。

皆の信仰がますます強まり、一人一人が「希望をもって信仰の道を歩む」ことを望みます。

今回の大会を無事に開催できたのは司教、司祭、札幌教区の教会の皆様、大会の準備に協力してくれた多くの方々のおかげです。特に今回の大会でも、札幌教区から大きな支援をいただきました。応援して頂いたお一人一人に感謝申し上げます。神様の恵みがいつも皆様の上に注がれますよう、私たち一同お祈り申し上げます。

(グエン・ティ・ズエン)

カトリックスカウト北海道大会

7月19日から1泊2日、羽幌町において「カトリックスカウト北海道大会」が開催され、スカウト・指導者・ガールスカウト北海道連盟の年長(中学生) キャンプ参加者等、計94名が集いました。

当初予定していた焼尻島でのキャンプは欠航の恐れがあり変更となりましたが、羽幌教会を中心にプログラムを行い、神様の導きのものと豊かな出会いや経験が与えられました。初日は大運動会やキャンプファイヤーで友情を深め、2日目には大会の中心である共同のミサをささげました。ともに祈り、歌い、感謝をささげたこの体験は、

スカウト一人一人の心の中に小さな信仰の灯がつけられたのであれば幸いです。

現在札幌教区内の北一条、美唄、旭川、留萌、羽幌の各教会でスカウト活動が続けられていますが、信者スカウトは少ない現状です。そんな中でも祈りとミサを大切に、活動を通して神様を知る恵みが与えられることを願っています。今回の大会テーマ「希望のスカウト」のもと、これからも各教会やそれぞれの地域で神様の望まれる道を希望とともに歩んでいきたいと思っています。

(羽幌教会・小寺光一)



札幌地区典礼音楽研修会

北海道としては、かなり汗ばむ夏7月12日、札幌地区で初めて典礼音楽研修会が行われました。

講師に東京神学院で聖歌指導をしている齋藤克弘先生をお招きし、午前は山鼻教会聖堂に80人程、午後は北一条教会聖堂に120人程の信徒が集まりました。旭川、十勝、胆振からの参加者もいて、地区を超え多くの方々が典礼音楽の知識を吸収し、深めたいという渴望の表れだと思いました。

講義は「典礼」という言葉から始まり、典礼の歴史にも触れ、普



段何気なく発している言葉「典礼」について真剣に考えるきっかけになりました。齋藤克弘先生は、典礼音楽における「詩編」の重要性について時間を割いてお話し、聖歌を歌う事は2倍3倍の祈りであると説明されました。

答唱詩篇の実技指導はとても解りやすく、すぐに実践できると思いました。どのように指揮をするかまで触れられ、答唱の八分音符は、きびきび歌いながらも、なめらかに歌うように心がけるなど、ややもすれば忘れがちになる事を改めてご指導下さいました。「その歌い方はきれいに聞こえるな」と、頷き納得の連続で、充実した

時間を過ごすことが出来ました。研修会の前後には、小教区のオルガニストとの交流もありました。

齋藤克弘先生の両会場での7時間に及ぶ講義、佐藤謙一神父、山鼻・北一条両教会の皆様のご協力に感謝いたします。この研修会はDVDで札幌地区19小教区にお届けするとのことですので、典礼勉強会に活用していただければ幸いです。

今回学んだことを伝播して多くの人と共有できる事を望みます。来年も典礼音楽研修会の第二弾開催を期待しています。

(月寒教会・井部守孝)

青年聖年ローマ巡礼

7/27〜8/5

聖年の祝祭ローマ巡礼を終えて

小樽教会・秋元惇

今回の巡礼は、初めて神様と対話ができたと感じた、とても素晴らしいものになりました。

事前の準備会や調べ物のなかで、今回の巡礼に参加するにあたって自分なりのテーマを考えましたが結局「これだ」というテーマが見つからないままの参加となり、ロー

マで四大バジリカやその他の教会を巡り祈っていてもなかなか見つけれないまま、あつという間にトルヴェルガータに着いていました。しかしトルヴェルガータでの祈りの中でようやく、今回の自分のテーマが「対話」だったとわかりました。

振り返るとそれまでのローマの日々で、私生活や信仰生活の中で感じていた悩みやストレスを神父や神様に吐き出したり、青年たちと分かち合ったりする中で、自分が神様に対してどう向きあっていたのか、そのためにどんな信仰生活を歩んでいけばいいのかなど、自分の信仰を深く見つめることができました。

最後の教皇ミサでは特に、普段自分の所属教会では侍者として奉仕することがほとんどで、ミサ中にゆっくり祈ることが全然できずにいたので、あのミサの中で祈っている間は神様と自分だけの時間だったと感じるほど、満足いくまで祈ることができた幸せな時間でした。こういう話を神父たちにしたら全員もれなく「ああ、こいつ神父になるぞ」って顔してました。まだそんな予定はありませんが、召命があつた場合、きっかけは間違いない。あの教皇ミサですね。



出発の直前に入院することになった時は「行けなかったらどうしよう」という不安と「どうせ神様がついてるから心配しなくても大丈夫」という自信が入り混じっていました。後から振り返ると、あのタイミングだから体調も万全になったし、事前に知識も仕入れることができて、ローマでの日々が素晴らしいものになったと感じます。2年前のWYDでも感じたことですが今回も「尽きぬ命の泉」からたくさんの水を汲ませていただきました。この水を綺麗に保てるように、誰かに分けられるように歩んでいきたいです。



フィリピンエキスポ - ジャー-2025

12日間の仲間たち

高校2年 石橋陽鶴

私が不安だったのは二つ。ひとつは日本人メンバーと仲良くなれるかもうひとつは英語でうまくコミュニケーションが取れるかということでした。結論から言うと、どちらも心配無用でした。今回のエクスポージャーのメンバーは5人だけだったので、全員としっかり話す時間がありました。2回目の参加で頼りになるはるえちゃん、同じ学校の先輩で話しかけやすいめいちゃん、同い年でいつも笑顔なゆうあちゃん、そして男女見境なく接しやすいはるとくん。今思い返すと、私は本当にメンバーに恵まれていたと思います。お互いに不安を抱えながらも、12日間助け合って過ごせたことに、心から感謝しています。

英語でのやり取りは正直うまくいかないことも多かったですが、拙い言葉にも耳を傾け、理解しようとしてくれる姿勢がとても嬉しかったです。イースタービレッジ(EV)の子たちが言葉以外でも「仲良くしたい」という気持ちを示してくれたことで、行動や誠意は言葉の壁を越えるのだと学びました。一方で、内向的な性格や体調不良から、簡単な英語すら聞き取れない場面もあり悔しさも残りました。だからこそ、次会うときにはもっと話せるよう英語を頑張ろうと思います。

やり残したことはたくさんあります。もっと話したかったし、もっと

色々な場所にも行きたかった。そしてなにより、またみんなとハグをしたいです。でもそれは再会したときの楽しみに取っておきます。

EVの御聖堂でのミサでは、「アーメン」という共通の言葉に国や文化を超えたつながりを感じました。その瞬間、私たちは神様のもので一つなのだと実感しました。日本に戻ってから、世界中で祈っている人々のために祈ろうという思いが芽生えたのは大きな変化です。神様が与えてくださった出会いと経験に感謝しつつ、再びみんなと会える日まで祈りとともに歩んでいきたいです。

エクスポージャーで学んだ事

高校2年 山北陽仁

自分はこの体験を通して日本に居ただけでは得られないような様々な体験や学びを得ることが出来ました。フィリピンの文化は日本の文化とは全然違って、例えば食事の時にスプーンとフォークを両手で使ったり、食べたり、会計がのんびりしているものがめめらなかつたり、といった具合で異文化を肌で感じました。

自分がこのエクスポージャー内で一番印象に残った事は、自分の物をEV内で紛失してしまった時に、EVの皆が協力して探してくれた事です。現地に着いて何日か経ったある日、無くした物に気づいて、夕食後に自分が物を無くした事を打ち明けた時、日本だったら「後で探そう」みたいになるけれど、この時は「すぐ

に皆で探そう!」みたいな雰囲気になって、暗い中、灯りを持って全員で捜索してくれて、最終的に無くした物が見つかりました。EVの人達の優しさが沁みて、やっぱり人は他人に優しいんだなと思いました。

そして、特定の出来事という訳では無いのですが、この滞在中の活動は基本的にこの日にこれをするみたいなのは決まってくなくて、その日の日に行きたい場所があるならそこへ行き、イベントを開くなら何日か前から準備を始めるといった感じで即興で進んでいったのも自分にとって新しい経験になりました。

自分が普段触れている文化とは異なる文化の人達に触れてみて、自分の生きてきた世界の狭さや、人の優しさは何処に行っても変わらないという事などをこのエクスポージャーから学びました。

小さな楽園で再出発を

高校3年 本村明唯

「EV」そこは祐川神父が言われた通り、「希望を取り戻す場所」だった。様々な事情で困難な境遇に置かれていた子供達が、それぞれ自身の人生を受け止め、文字通り「復活

し、今を前向きに生きる姿に胸を打たれた。過去を背負いながら未来へと生きる彼らの姿勢は、人生を懸命に歩むことの尊さを教えてくれた。彼らと触れ合う中で、ふとゴーギヤンの《我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか》

の絵画を思い出した。出自に左右されず、自身の存在を模索しながら未来へ向かい生きて行く姿は、まさにこの問いに向き合っている様だった。人は誰でも、自分とは何かを考えて生きているのではないかと気づかされた。

また、この経験を通して、私は「家族」についての考え方を大きく見直す機会になった。これまでの私は、家族とは血縁によって結ばれた関係だと当然のように考えていた。しかし、出会った人々の姿から、家族とは血の繋がりが法的な関係に捉われず、一人一人の思いや努力によって築かれていくのだと気づかされた。家族は「なる」ものではなく、「作り上げていく」ものだとかから実感した。

同時に、子供達の生き様に触れたことで、自身の将来像について今一度再確認することとなった。生活の中で生じる苦しみや悩みが寄り添い、その人の立場に立ち、共に解決策を探っていくような、国内外を問わず困難な状況に置かれた子供達に夢や希望を届けられるような存在になりたいと改めて強く思った。

今後、大学では文化・言語・歴史といった幅広い分野を学んでいく予定だ。学びの中で、異なる価値観を持つ人々と対話を重ねていき、互いを理解し尊重し合う関係を築く力を養いたい。無理解や無知は、時に人を孤立させ、生きづらさを生み出す原因となる。このことを実感した今、自分が連鎖を断ち切る一助になれるよう、学びを深めたい。

私はもともと国際問題にとても関心がありました。そんなある日、授業でEVについて学び、衝撃を受け、実際にEVに行つて現地の人と交流をして、私たちがみんなの幸せのためにできることや今後私たちが自主的に活動できることは何かを考えたいと思うようになり、この企画に参加することを決めました。

最初は生活面や食事面など日本とは異なるため不安な気持ちがありました。しかし実際に現地を訪れてみると、美味しいお料理がたくさんあり、生活面でもだんだん慣れることができました。特に嬉しかったのは、EVのファミリーと仲良くなれたことです。知らないことは何でもわからない私に、彼らは一から丁寧に教えてくれました。言語という大きな壁があり最初は少し大変でしたが、お互いがジェスチャーを使いだんだん会話が弾むようになり心の距離も縮まったように感じました。

中でも私が一番思い出に残っているのは、帰る前日のお別れ会です。EVのみんなが私たちにたくさんのおもてなしをしてくれました。特に私はEVのみんなが最後にベストフレンドという歌を歌ってくれたことがとても印象に残っています。この合唱を聞いて本当

に来て良かったと心の底から思いました。ここに来て、改めて人間の温かみ、家族の大切さを知ることができました。みんなに将来の夢を聞くと、ダンサーや歌手、EVで働き恩返しをしたいなど素敵な夢を私に教えてくれました。

みんなのおかげで私は自分に自信が付き、気づけば私がみんなから幸せをもらっていました。私もみんなに恩返ししたいのでこの貴重な経験をここで終わらせたいのではなく、多くの人に知ってもらう活動をしていきたいと思えます。短い間でしたがEVのファミリーの一員になれてとても嬉しかったです。また会いに行きます。

違いの中で、つながる心 高校3年 本村晴恵

今回で二度目となるEVでのボランティアは、私にとって「縁」という言葉の意味を深く考えさせられる時間となりました。

到着すると、「また来てくれてありがとう」と迎えてもらい、まるで自分の家に帰ってきたかのような温かさを感じました。初めて訪れたときは、言葉も通じず、自分がここにいるのかという不安と遠慮から、なかなか心の距離を縮めることができませんでした。けれど、今回は子どもたちと目が合った時に笑い合い、すぐに輪の中に溶け込んでいました。前回の経験や、再会を喜んでくれる笑顔

が、私の緊張をほぐしてくれたのです。そのとき私は、自分の中に人とのつながりを信じる力が育っていると感じました。

一緒に過ごした子どもたちは、私のつたない英語にも笑顔で応えてくれました。彼らにとつて、私がよそ者であるかどうかは問題ではなく、今ここにいる自分として、まっすぐに受け入れてくれていたのです。「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉が、ふと心に浮かびました。愛とは、自分の利益を求め特別な何かをすることではなく、相手の幸せを願う目の前の相手を大切にしようとする日々の選択なのだと、この9日間を通して学びました。EVの人々は、日々の暮らしの中で自然に体現していました。その姿に触れたとき、私は「縁」というものが偶然に生まれるのではなく、互いを思いやる心から少しずつ育まれていくものだと実感しました。

帰り際、「今度はいつ来るの?」と尋ねられたとき、私は「また戻ってきてほしいんだ」と安心しました。彼らにくれた愛を通して温かく広がっていく「縁の輪」の中に、私自身も包まれていました。共に生活し、笑顔の絶えない時間を過ごしたことは、私にとってかけがえのない宝物です。

この経験を胸に、私は将来、人と人とを結びつけ、違いを越えて心をつなげるような存在になりたいと思っています。

ブーゲンビリアの園から

この夏、恒例の高校生フィリピンエクスポージャーに引率の一人として同行し、ブーゲンビリアの花で彩られたEVを初めて訪れる機会を得ました。

「イースタービレッジ・ミンダナオを支える会」として、子どもたちやEVの様子を、日頃、ご寄付を頂いている支援者の皆様に感謝の気持ちを込めてお伝えいたします。

現在、EVには、ホームに住んでいる子どもが6名、自立支援プログラムに沿って暮らしている14歳以上が12名、奨学生14名。そしてスタッフ9名が働いています。

この41名のファミリーと日本からの訪問者8名の約2週間の生活では、様々なイベントが計画されていました。公立の学校訪問、市内視察、ミサ参加、フィリピノデー、ジャパニーズデー、タレントショー、創立33年アニバーサリー等、毎日、エネルギーッシュで、ダンスが得意で、屈託のない笑顔が、フィリピンの暑さや蚊からの攻撃にもめげずに過ごすことができた一番の要因であったことは、今回参加した高校生も同様であったのではないかと思います。

何より感心したのは、EVの子どもたちの繊細な心遣い、ホスピタリティが飛び抜けて高いことで

す。私たちが欲している物や事柄を直ぐに感じて、行動に移すことに驚きを隠せません。

毎日の朝食・夕食前には鐘がなり「アンジェラスの祈り」を唱えます。

8月3日主日ミサの福音は、ルカによる福音「自分のために富を積んでも神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」祐川神父は説教で、自分のためではなく、他の人のために生きることの大切さについてお話ししてくださいました。このようにミサの説教の中で、また日常生活において、自然に子どもたちが愛を実践する人へと心が養われ、共感力が高められてきた証です。

今回、参加した高校生がフィリピン文化や子どもたちとの交流を通して、人を愛する心と知恵が与えられていますように。神様が子どもたちをいつくしみ、慰めてくださいますようにと祈りながら。(イースタービレッジ・ミンダナオを支える公事務局・西田あつこ)



9・1を忘れない！

9月1日札幌教区カトリックセ
ンターにて平和と共生を考える札
幌集会が開催されました。

1923年9月1日関東大震災
の混乱の中で、多くの朝鮮人や中
国人、日本語をよく話せない障が
い者が群衆に捕えられ、虐殺され
ました。犠牲者の正確な数は未だ
明らかにされていませんが、数千
人とも言われています。理不尽な
事件を引き起こしたのは、実は普
通の日本人でした。

そのようなことを二度と起こさ
ないために、その記憶を語り継い
でいきたい。外国人、障がい者差
別が起きようとしている社会に向
けて、キリスト者として何を発信
すべきか、共に考えたい。そう思



い、昨年から教派を超えたエキ
ュメニカルな活動として、この集
いを始めました。

2年目となる今年は、元・北星
学園大学教授の古賀清敬牧師に
「なぜ、関東大地震朝鮮人虐殺は
引き起こされたのか―過去をふま
えて、命を守るために―」と題し
て講演いただきました。大震災ま
でに、朝鮮にはすでに多くの日本
人が植民者として入り、その数は
在日朝鮮人の約4倍であったこと
など、日本、朝鮮双方の歴史資料
から、当時の社会背景を明らかに
されました。

そして、朝鮮の人たちの土地、
権利を一方的に奪っていった植民
地主義が、その根本的な原因であ
ると話されました。旧約聖書「出
エジプト記」は、奴隷の側にあっ
た民衆の歴史伝承であり「支配者
側のつくる歴史」とは違います。
私たちは「十戒」をもとに植民地
主義を強く批判していくべきであ
る、と語られました。

約35名の参加者があり、分かち
合いを含めた学びの場となりました。
講演の様子は、札幌教区ホー
ムページのエキュメニカル委員会
のYouTubeで配信しましたの
で、いつでも視聴可能です。

(下段記事共にエキュメニカル委
員会代表・小野有五)

8・15平和行進



毎年、超教派の集いとして開か
れる8・15札幌平和祈禱集会と
平和行進。今年は18時からクリ
スチャンセンターで集会がもたれま
した。

カトリック北一条教会での平和
祈願ミサを17時からにしていただ
き、ミサ終了後、会場に車で移動
し、日本キリスト教団岩見沢教会
大川清牧師による「軍勢力で平和
な未来は築けない―基地の町、岩
国で経験したこと」という講演を
聴いたあと、大通り公園まで約30
名で平和行進をしました。「シス
ターが先頭に立つと、キリスト者
の行進だとすぐに街の人たちにわ
かってもらえるので良いですね。」
と好評でした。

Peacedays2025

平和をつなぐ音楽会NO TO WAR 戦後80年チャリティーコンサート

2025年8月11日(月・祝)カトリック北一条教
会聖堂を会場に、札幌で活躍するプロのミュージ
シャンによるチャリティーコンサートが開催され
た。北一条教会英語ミサの聖歌隊も特別出演。よ
びかけの中心となった歌手のエスミさんは2011
年東日本大震災以降、音楽による支援を数々行っ
ており教会での人気も高い。アイヌの楽器トン
コリから始まり、ピアノ、ギター、ドラムス、ヴァ
イオリンなどの楽器演奏や味わい深く迫力ある歌
声と、ミュージシャンたちがそれぞれの想いで選
曲した数々の音楽が真夏の聖堂に心地よく響き渡
った。フィナーレはマイケル・ジャクソンのHeal
The World(世界を癒そう)。配布された歌詞を
見ながらみんなで声を合わせて歌う。♪世界を癒
そう、より良い場所にしていこう、あなたと私、

全ての人類のために・・・

参加者64名にミュージシャン16名を含めて80
名、音楽が人々をつなぎ祈りの場となったことに
感動した。寄付金も沢山集まり感謝。

入場料から経費を除く全額がカリタスジャパン
を通じて地震被害を受けたミャンマーへ65,000
円、北海道パレスチナ医療奉仕団を通じてガザの
人々へ100,000円が届けられる。(札幌教区正義
と平和協議会・藤田春美・小野幌教会)



♡ミャンマー人 結婚式と黙想会♡

昨年、夏のミャンマー人司祭によるミャンマー語の黙想会が初めて札幌教区で行われた際に、一組のカップルから結婚の相談があった。彼らは、札幌と登別に離れて暮らしながら、オンラインで結婚講座を受け、少しずつ結婚の準備をした。彼らを取巻く仲間たちも彼らの結婚を楽しみに準備を行い、8月30日、北一条教会で手づくりの結婚式と祝賀会が行われた。



（難民移住移動者委員会・西千津）

その後、ミャンマーに住む家族からのビデオメッセージが紹介された。ミャンマーから家族を呼ぶことも彼らが結婚の報告で帰国することもしばらくないだろう。家族は集えなかったが、彼が通う登別教会のみなさんに参加されていて、彼らと良に良い関係を築いているのかを知った。

昨年の夏、彼らは札幌教区のミャンマー人結婚第一号である。ミャンマー人司祭とも相談しながら、模索しながらの準備だったが、式はもちろん、祝賀会場の準備などお手伝いいただいた北一条教会の皆さんにも感謝である。翌日には黙想会が行われ、講話と分かち合いも彼らにとっては大切な時間となった。共に集い、共に祈る：彼らの笑顔にその大切さを改めて教えてもらった二日間だった。

神父さんの つれづれ記

天職



苦小牧・静内
東室蘭・登別教会協力
小林 薫 神父

昨年7月にコロナウィルスに感染し、3週間の入院を余儀なくされてしまいました。緊急搬送され、入院先の病院にはたいへんお世話になったのです。医師の先生をはじめ看護師、介護士、リハビリの先生方には感謝してもきれない。振り返ってみて、日々のマスクの着用、手洗いと殺菌の励行を怠っていたのが原因ではなかったかと気づかされたのです。買い出しを週一度していますが、人混みの中にいることに少々無頓着になっていったわたしでした。「コロナウィルスも下火になった。やれやれ。」との思いが心の隅にあり、油断したことが原因だと気づかされたのです。

看護師さんをはじめとして、患者さん一人一人に病院のスタッフ誰もが笑顔で対応し、関わっていることに会った3週間でした。入院している患者さんをどのようにして励まし元気づけるか、最大目標は元気になって一日も早く退院を迎えることができるようにという心遣いではないかと感じられました。笑顔こそがその一番の力になるということなのだ、と入院していて確認したことでした。

丁寧に手当てをしていただき、笑顔をいただけて、入院しているわたしも笑顔にさせていただきました。少しずつ元氣を取り戻して、「ありがとう」の思いが強まるばかりでした。「天職」ということばがあります。が、労を惜みず、精一杯自分を捧げておられるという実感と共に、それぞれの天職を全うしていると確認させてもいただきました。リハビリの先生と話す機会があり、わたしの思いを伝えました。「皆さんのなさっているお仕事は天職ですね。」即座に先生から返事が返ってきました。「はい、リハビリの仕事はわたしの天職です。」天から授かった仕事を一日一日精一杯患者の皆さんに尽くしておられるその姿の意味をその言葉と共に確認することができました。振り返って、「わたしはいろいろなうか。出会う人との関わりを、それも笑顔で関わっているだろうか。どうなんだろう。」と、自分を見つめなおす良い機会が与えられた3週間でした。

■お知らせ■

白石共同墓地（合葬墓）の納骨期間は原則4月から11月までです。積雪期間（12月から3月）は納骨を行いません。詳しくは右記教区本部事務局までお問い合わせください。

クリプト札幌

カトリック札幌司教区納骨堂
札幌教区カトリックセンター地下
家族壇568区画・合葬壇730
天候問わずいつでも墓参可能



お問い合わせ 〒060-0031 札幌市中央区北一条東6丁目10 札幌司教区本部事務局
電話 ■白石共同墓：011-241-2785 ■クリプト札幌：011-221-4244
いずれも平日9:00~17:00（土曜日曜祝日及び夏季冬季休業を除く）

白石共同墓

札幌市白石区平和通10丁目北5-1
札幌市白石本通墓地
札幌教区の司祭・修道士・信徒なら
びにその家族を対象とした合葬墓

札幌地区平和旬間講演会

8月16日札幌地区宣教司牧評議会主催による平和講演会「あなたたちに平和があるように」を開催しました。講師は函館地区湯川教会と八雲教会の主任司祭アンセルモ李神父。李神父は韓国馬山教区から3年前に札幌地区に派遣されており、講演会には42名が参加されました。

李神父は自己紹介の中で、韓国は現在も休戦中であり戦時体制が続いていること、神学生時代に徴兵訓練を受けたことを話し、徴兵訓練で渡さ



れたご自身のステンレス製2枚の認識票を示されました。認識票は、軍隊において兵士が身に着け、平時でも戦時でも死亡時の個人識別に使われるものです。参加者はこの認識票を見せていただき戦場におけるリアル感の一部を体感しました。

李神父は「私たちが祈る平和は神が与える平和です。周りの状況がどうあろうとも、私たち一人一人が人間の欲望を捨て、神の平和と恵みの中に生きることが平和へとつながる」と語られました。戦争状態にある韓国と、日本の平和に関する考え方の違い、カトリック信者の平和への生き方、祈りを教えていただきました。

(北二十六条教会・北村良隆)

お惠民いっぱいミカエル祭

第52回ミカエル祭が9月28日(日)羽幌町内で開催されました。羽幌教会・藤幼稚園・ボーイおよびガールスカウトが心を合わせて準備した恒例のバザーで、地域に根差した行事として長年続いています。

当日は、教会や幼稚園の関係者だけでなく、園児やスカウトのOB・OG、そしてその父母をはじめ、多くの町民の皆さまが足を運び、小さな羽幌教会を温かく支えてくださいました。町全体に支えられていることを実感するひとときとなりました。

ミカエル祭の目的は、第1回から変わることなく、収益のすべてを国内外の災害義援金や社会活動支援に役立てることです。今年もその精神は受け継がれ、来場者の思いが世界へと広がっていきます。特に今回は、スカウトの子どもたちが自らの言葉で来場者に挨拶し「世界で困難に苦しむ人々のために、私たちにできることをしたい」という願いを語り、食糧不足や戦争、病気に直面する人々への祈りを分かち合いました。そして「皆さんがここで買物をして、遊びを楽しんでくれることが、世界の誰かを支える力になる」と集まった方々へ感謝と喜びを伝えました。

当日参加・協力されたすべての方々に、神様の豊かなお恵みが注がれることを願っています。

(羽幌教会・小寺光一)

藤学園百周年記念式典

藤天使学園が札幌藤高等女学校開校から数えて百周年を迎え、9月27日、藤女子大学講堂において記念式典が執り行われました。

学園に関わられ帰天された全ての方々への黙祷と、勝谷司教の先導による神への感謝の祈りが奉げられました。その後の祝辞・式辞では、勝谷司教から、式典に参加した藤女子中学校・高等学校の生徒さんに向け、直前に読まれた福音「私があなた方を愛したように、互いに愛しなさい」に関連して、自身の召命のきっかけとなったのが、失恋の痛みをカトリック学生同士の分かち合いで吐露した際、涙して聞いてくれた人がいたこと、しばらく後には自分も他の人の話に涙した、驚きの経験であったことを披露されました。

駐日ローマ教皇庁大使エスカランテ・モリーナ大司教からは、この度の百周年の学園の祝いの三つのモットー「感謝をもって過去を振り返る」「熱意をもって現在を生きる」「希望をもって未来に向かう」についてお言葉を頂きました。Sr永田淑子学園理事長の式

辞では、学園の教育の原点が、初代校長Srマリア・ヨハンナ・サロモンの最期の言葉「私は自分のいのちをお捧げするだけではなく、喜んでお捧げします。それによって、愛する神様が日本の子供たちを祝福してくださいますように。」にあること、そして百年の喜び悲しみ苦しみのお出来事を振り返られた後、これまでの感謝と今後への支援を願われました。

式典終了後には、藤女子中学校・高等学校オーケストラ部(九十周年の時には部員数30名、現在は60名)による演奏会が行われました。

(桶田達也助祭)



第58回 園長教職員研修大会

7月26日(土)藤女子大学(札幌市)を会場に、全道のカトリック園(幼稚園・認定こども園・保育園)の園長や教職員を対象とした研修会が行われ、対面とオンラインのハイブリッド形式にて道内58園、約400名が参加しました。

開会式の後、幸田和生司教(東京大司教区元補佐司教)による「希望を分かち合う」カトリック園と子ども達」をテーマとした講話と「司教様教えて！」と題したコーナーにて各園から事前に募集した様々な質問に分かりやすく真摯にお答えいただきました。



続いて事例報告では釧路地区各園の楽しい取り組みの発表、最後にチャペルにて伊達教会所属の齋藤真知亜・律子夫妻「nicoichi violin」(ニコイチヴァイオリン)によるミニコンサート。心のこもった美しい旋律に癒されたのち、祈りと聖歌を共に捧げて閉会となりました。

カトリック園で働く先生方の心に希望を灯し励みとなる充実した一日となりました。(北海道カトリック学園・杉野直子)

カトリック教職員研修会

9月11日～12日に札幌教区カトリックセンターにて、道内6校計20名が集まり、教職員研修会が行われました。講師として上杉昌弘神父、祐川郁生神父、北海道大学名誉教授の小野有五氏の3名をお招きし、また当番校(北見藤)の事例を交えながら、社会とカトリック学校がどのような役割を持つているのかを、各々の実践とともに講話をいただきました。

祐川神父「カトリック教育



が大切にしていること」では長年携わって来られたイースタービレッジ(児童養護施設)での経験、当番校事例研究では「社会と繋がるカトリック学校」をテーマに、行事や授業の中での取り組みを実践例として紹介しました。

小野氏「無宗教？仏教？の日本人に向けた宗教教育―ブツディスト・クリスチャンの勧め―」では無宗教の人が多く日本で、自然の中に見られる宗教観を中心に仏教とキリスト教について、上杉神父「これからのカトリック学校に求められること」では聖書を実際に開きながら福音を共有し、

最後に上杉神父による司式でミサが行われました。

研修会は終始和やかな雰囲気で行われ、参加者からも各々の学校の様子を知れて良かった、良い情報交換の場になったという声が聞かれました。今回の研修会が、多くの実を結んでいくことを願います。

(北見藤高等学校・高橋美保)

函館地区幼保連研修会

去る9月23日秋分の日に、コロナ禍によって開催が中断されていた函館地区のカトリック幼保連盟研修会が久々に宮前町教会を会場に開催されました。

今回は、国が行っている教員のキャリアアップ施策の対象となるよう日本カトリック幼保連盟公認の研修会としたこともあり、函館カトリック学園(元町百合・湯の川・七飯マリア・八雲マリア・長万部マリア・江差)、函館白百合学園幼稚園、藤天使学園(函館藤)・函館カトリック社会福祉協会(海の星・児童発達支援センターうみのほし)の10施設から71名の参加があ

りました。

講師は、元函館市子ども未来部子どもサービス課課長、現北海道教育大学函館校キャリアセンター副センター長の柴田成氏(湯川教会信徒)にお願いしました。テーマは、全日本私立幼稚園幼児教育研究機構の指定する27の内、「愛情深い保育(心の教育・保育)」を選び、それに沿ってミッシェンスクールの強み、モンテッソーリ教育(心の教育と頭の教育)、保護者・教員に選ばれる園とは等について、教育行政に携わってこられた見識、苦労された自分の子育て体験などを織り交ぜ熱のこもった研修となりました。

(桶田達也助祭)



北一条教会で行われている英語

ミサが始まったのは、1989年である。当時は、山鼻教会の信者で国際協力委員会（現・難民移住移動者委員会）のメンバーだった方が、札幌教区でも英語ミサを望む声があると考え、始めた。始めたというのは、当時、教区事務局ではそのような認識がなく、協力を得られず、一人で調整を行っていたからである。

現在、各教会で取り寄せている「聖書と典礼」

の英語版を彼女が単独で自宅に取り寄せ、英語ミサを司式してくれる司祭を探し、日程調整をし、

北一条教会を借りていた。

月1回だけ開催されていた英語ミサの後にはベネディクトハウスにお茶とお菓子が用意されていて、そこでお手伝いが私の教会でのボランティアの始まりだった。

月1回ではなく、毎週ミサに与りたいと当時通っていた人々から声があがり、その中心となっていたイタリア人と共にまだ信者ではなかった私は、要望書を書き続けた。今、考えると無謀だったと思うが、地主司教宛、中央協議会宛

白柳枢機卿宛にも送った。

どこからも正式な回答がないことに納得しなかったイタリア人は、バチカンに直談判した。彼の亡くなった父親は、バチカンで働く医師だったからだ。それが功を得たのかどうかかわからないが、それからしばらくして、突然毎週になり、教区管轄で行われるようになった。

一時期、北一条教会で行われていたこともあったが、現在は毎週日曜日の12時30分から行われ、数年前から教区管轄ではなく、北一条教会の英語ミサという位置づけで行われている。海外からの観光客増加もあり、毎週200人近い人が参加している。

英語ミサ

ともに生きる

いろいろな国の人が参加しているこのミサで、聖歌隊の役割はとても大きい。その日の朗読や福音などを考えながら、初めて集まった人々が共に歌えるように選曲している。初めて一緒に歌っているとは思えないようなハーモニーが聖堂内に響きわたり、その歌声に時々驚き、感動することがある。

ぜひ、一度参加を！

（札幌教区難民移住移動者委員会・

西 千津）

殉教者聖ゲオルギオの

フランシスコ修道会



Sr. M. ヨゼフィーネ
伊勢美繪子

7月19日愛心メモリアル病院にて神様のものと召されました。89歳。

【略歴】

1936年6月11日生まれ
1948年12月24日受洗
1963年3月25日入会
1972年8月12日終生誓願
2015年11月23日誓願金祝



Sr. M. ユステイツィア
安代トミ枝

8月24日花川マリア院にて神様のものと召されました。87歳。

【略歴】

1938年7月31日生まれ
1955年4月10日受洗
1964年9月8日入会
1975年8月12日終生誓願
2016年11月23日誓願金祝

訃報



Sr. M. クレメンチア
加藤はつ江

10月5日花川マリア院にて神様のものと召されました。98歳。

【略歴】

1927年2月15日生まれ
1948年3月27日受洗
1956年3月19日入会
1964年9月23日終生誓願
2018年11月3日ダイヤモンド祝

カトリック札幌司教区
ハラスメント対応デスク

080-2879-3168

火曜～金曜 12:00～16:00
祝日夏季冬季休業日除く

✉ sapporo.harassmentdesk@gmail.com



9月15日
から20日まで、例年の札幌教区司祭黙想会が北斗市のトラピスト修道院（灯台の聖母トリスティ大修道院・厳律シトー会）で開催されました。期間中、出入りはありましたが、全道から15名の司祭・助祭が参加しました。

毎日のミサのほか、3時45分の読書に始まり19時40分の寝る前の祈りまで修道院の聖務日課には任意に参加します。また、午前中には参加者による分かち合いが行われ、近況報告では求道者が増えてきたとの報告がありました。今年は外国人司祭の来日動機や宣教についての思いなどを聞くことができました。

高齢化に伴い、黙想会に参加出来ない神父が次第に増え、修道会の活動も縮小してきている状況の中で、勝谷司教から「カトリックの司牧宣教の流れは五十年・百年スパンで大きな波をえがくものです」との、指摘と励ましがありました。神父方は、リフレッシュされ、様々な思いを携え、各小教区へ戻っていかれました。

（桶田達也助祭）